

ニュース

### チュリア・マハバラートの旅 (その2)

#### A Botanical Journey to the Chulia and the Mahabarat Ranges, Central Nepal (2)

このあたりまでは子供くらいの大きさの猿(ランゲルザル)がたくさんいます。顔が黒くて頭は白く、身長と同長の尾をもち、10頭ほどの群をなして樹上を飛び歩きます。ときどき落としものをするので、糞生菌の研究に頼まれた材料を手に入れようと試みるのですが、50m以内に近づくと落とす物も落とさないで逃げてしまうし、遠くから落としたのを見届けて、藪をかきわけて行っても見つけることができず、あきらめました。

今日は昨日たどった大きな道に沿って歩きました。この道は数年前にネパール軍がヒタウラからカトマンズまで建設したのですが、維持のための手入れをしないのでズタズタになり、今ではジープも通れません。ひどいところは地滑りでそっくり無くなっています。工事中に事故死したインド人技師の記念碑がありました。Makwanpur Carhiのあたりから、*Shorea*に代わって

*Schima wallichii*の林になりました。500mを越えた高度です。*Schima*はカトマンズ盆地の1500mあたりまで見られます。夕方になってたどりついたシワンタの部落で、B君と人夫は坐りこんで延々30分も議論したあげく、暗くなってからまた前進です。人夫はここで泊まろうというのですが、B君はここにはパンチャットがないのもっと先に行こうというのです。すこし進んでみられど、パンチャットがないのは同じなので、道の真中にテントを張りました。晩飯は午後10時。

我々の食事は次のようなものです。①チャパテ(ふくらし粉ぬきのホットケーキ)、②ゆで卵、③ジャガイモとタマネギのカレー煮、④ダルスープ(挽き割りレンズ豆の粥)、⑤白い飯、⑥水、⑦つけ物。朝は①②③⑥、昼と夜は③④⑤⑥⑦。これはある特定の日の食事ではなく、全日程を通じて全く同じです。変化があったのは、鶏を買ったとき(三回)、魚を買ったとき(二回)で、いずれも③に煮込んでしまいます。魚は串にさした干物を、頭も骨も一緒に煮込んでしまいます。できあ

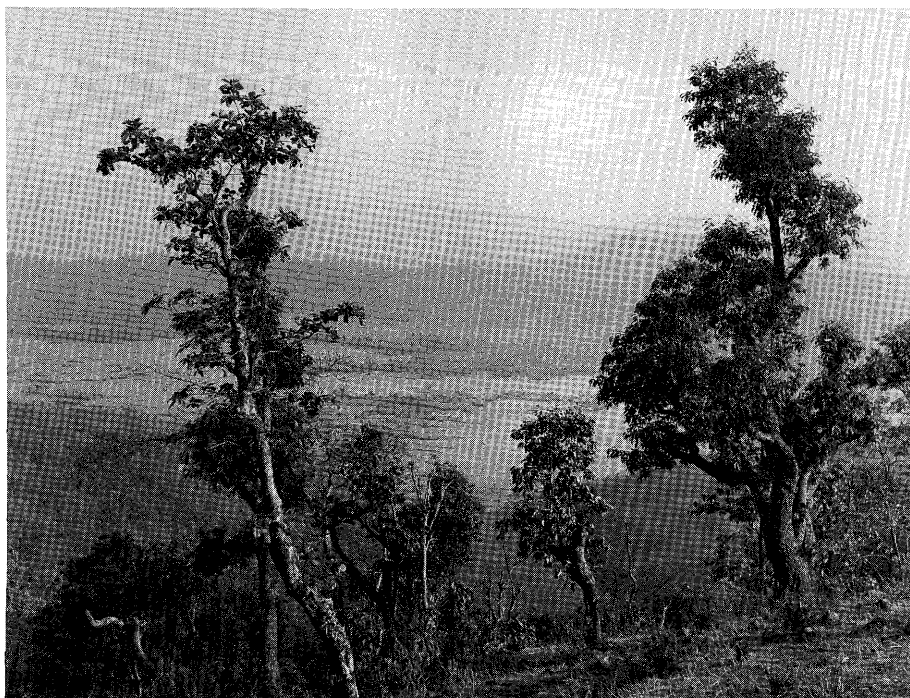


Fig. 7. Makwanpur Garhi 付近の *Schima wallichii* の林。たいへん荒れている。

がった料理は背骨や頭骨がゴロゴロしていてちっともうまくありませんが、あちらの人にはおいしいようです。他の機会に焼いて食べてみましたが、干し方が悪く、臭くてだめでした。ネパールでは、タンパク質の焦げるにおいはタブーのようです。これはにおいを不吉とするのと、火の神聖をけがさないためと両方の意味があります。肉も決して直火であぶることはしません。ダルは米飯を食べるときにつきもので、これ無しで飯を食うことは考えられないそうです。ところがこのダルスープは、僕にいわせると味もソッケもなく、しかも塩をいれても味の素を加えてもちっとも味が変わらない、バッファー（緩衝液）のような代物で、家でコック（僕でもこういう国へくると、コックを雇えるのです）がこれを作ったときには、もうあきらめて何も味つけを試みないことにしているほどです。ところがネパール人は、このソッケないところの微妙な味がコタエられないと言います。ゆで卵は殻のまま出せばよいのに、ごていねいにも殻をむいたうえ、ククリ（ネパール刀）で四つに切って出しますから、手垢がいつぱいついています。切るといってもまな板は使わず、ククリの刃を手前に向けて柄を地面に足でおさえ、卵でも芋でも手でこの刀に押しつけて、向う側へ切れたものを、落とさないように掌でつかむのです。手垢はきたない部類には入らず、スプーンなどに汚れがついていると、指先でぬぐいとって出します。お茶に蠅が飛び込んでいても平気でそのまま出し、「蠅が入ってるぞ」というと、指でつまみ出して残りをそのまま持ってきます。

飯の量が多いのは驚くほどで、直径 30 cm のステンレスの盆の三分の二ほどに山盛りにしてきます。箱根の神山と芦の湖の盆景といったところで、芦の湖には③④⑥がそれぞれカップに入っています。③④のカップは小さいけれど、⑥はビールの小ジョッキほどあります。⑦は飯につきもので、日本のカレーに福神漬やラッキョウがついてくるのは、これに由来しています。B君はダルを飯にかけて③とまぜ、僕の倍くらいのスピードで平らげてお代わりをします。僕の方は山を四分の三崩すのがせい一杯です。お茶は食事のときには出ません。キャンプについてしばらくす

ると茶が出ます。B君は一杯しか飲まないけれど、僕は飯が遅いので腹を保たすために二杯のみます。小ジョッキの二杯ですから、腹がダブダブになり、飯の量が減る原因となるのですが、こうしないと飯までに腹がへってがまんできません。空腹に耐えて待っても、食事の味はそれに値しません。おかげで「金井さんはお茶が好きだ」ということになり、いつも二杯のまされることになりました。僕のシェルパが「家では、ティーカップ・二杯しか飲まないのに」と首をかしげていました。うまくないものを、しかも全く同じものを毎回食わされるのですから、食べないと動けなくなるからという他に食べる理由はありません。こんな献立では栄養がとれないから量を沢山とるのでしょう。大学食堂のA定食（いちばん安い）を毎回食べるようなものです。A定食だって毎日中身は違うのだからそれ以下です。ネパール側としてはトウガラシを入れないようにしたり、スパイスを控え目にしたりして、僕のために気を使ってくれているのですが、なんとも味気ない食事です。それでも毎日なんとか食べていたので、B君が「ネパールの食事を平気で食べる外人ははじめてだ」と感心してくれました。あとになって考えたら、ネパール人は二食主義ですから、一日三度食事をだしてくれたこと自体が、僕に対する大サービスだったのです。前におられたI先生はこの食事が口に合わず、旅へ出るとずいぶん痩せたそうです。もっともI夫人の料理はたいへんうまいせいでもあります。僕なんかはふだんから鍛えられているから……。これも内助の功の一つでしょう。

4月23日 この日はじめて、カトマンズ盆地から流れ出るバグマチ川の中流に出ました。このあたりになると森林はなくなり、耕地ばかりです。本来の森林は *Schima wallichii*, *Castanopsis tribuloides*, *C. indica*, *Quercus spicata* などが混ざっているようです。こういうところでは「音入」がたいへんです。どこへ行っても見通しがきくので、誰かが見ているような気がします。テライのジャングルでも、木は多くても下生えはこの時期にはたいへん少なく、しかもほとんど焼き払われていたので見通しがよく、人家がなくても牛

飼いがウロウロしているので、これまた大変でした。ここらへ来ようという人、とくに女性は対策を十分に考えてきてください。僕は朝でも夜でも状況に応じて切り替えられるので、何とかしのげます。

さてバグマチ川は、峠から見たら水がチョロチョロ流れているだけみたいでしたが、河原に立ったら19日の川よりも広くて急流で深さもあり、こちら側ばかり歩いていたらとうとう行き詰まり、岩壁を30mばかりトラバース。いずれにせよ対岸に行かねばならないので、合流点の川幅が広まったところを股までつかって渡渉、今度は支流のカニコラを溯ることになりました。人夫の食糧がなくなったので、売っているところまで行かないと泊まれないそうです。薄暗い中を何回渡渉したかわかりませんが、今度は幅5mほどで深さも脛までだったので楽でした。真っ暗になってから、河原に建つ掘建小屋につきました。これが目指す店なのですが、あるのは茶ばかりでした。もう30分行けば食糧を売る店があるということです。ネパールの人の時間や距離の見積りは頼

りにならないので、また一時間以上歩くのかと思ったら、本当に30分で店があり、食糧も手に入ってやっと泊まることができました。午後8時30分でした。ホテルがたくさん飛んでいましたが、7時半頃が最盛で、8時になったらいなくなっていました。このホテルの光り方は……（・は短く明るく、—は弱く永い。一周期約2.5秒）だなど見ていましたが、カトマンズへ来てみたら光り方が————と全く違い、別物らしいです。採集しとけばよかったと思っても後の祭でした。

4月24日 明るくなってみたらひどい荒れ谷で、屏風の隙間のような峡谷の崖錐の上の狭い広場でした。ヤSPAというところです。

絶壁伝いの道を這い上がり、枝尾根の上に立ったら谷全体が見渡せ、やっと自分がどこにいるのかわかりました。こんな急斜面も耕地ばかりです。B君はまたもやパンチャヤット探しですが、目指す相手は谷をへだてた向う側なのであきらめました。あそこへ旅行証明をもらいに行ったらそれだけで一日かかり、一日かかったという証明を



Fig. 8. Nigate Bhanjyang より南望.

またもらいに行かねばなりません。さらに上がると一昨日からたどっている旧自動車道にぶつかり、これを延々とたどって、午後遅くカトマンズ盆地南縁の峠、ニガテ・バンジャンにつきました。北は広々とした緑の盆地、南は深く切れ込んだ谷をへだてて、赤茶けた耕地に地滑りをちりばめた急斜面で、対照的な光景です。

本当はここから盆地最高峰のフルチョウキに向かうはずでしたが、またもや人夫の食糧が無く、仕方なくそしてヤレヤレもう登らないで済むという気持ちで、北へ下って行きました。上がってくるときには店はいくらかあったのに買わなかったのは、6人の人夫の荷物が採集品で各自30kgを越えており、これ以上重くなってはたまらぬということだったのでしょう。

川の合流点にあるティカバイラブに泊まりました。近くの山腹にライ病院があり、B君の兄貴が勤めています。B君はそこで歓待してもらいたかったようですが、「この河原の方が広くて気持ちがいい」と頑張っ、そこにテントを張りました。夜はずいぶん冷え、二・三度目がさめました。第一日からそうなのですが、今は気温が最も高い時期なのに、寝袋に入って暑かったことは一度もありません。以前9月下旬にピラトナガルで暮らしたときは、何か体にかけるだけでも汗びっしょりになったものですが…。

4月25日 今日にはまっすぐにカトマンズに帰るのかと思ったら、B君は真面目にも、昨日とりやめたフルチョウキ行きを、任務通りやろうというのです。人夫を先に返して、僕とB君と僕のシェルパとB君付きのコックと4人ででかけました。ついでに言うと、コックというのは人夫よりずっと高級な職業で、チームでは秘書官役なのです。

近くにレレという有名なお寺があります。サラスワティ(弁才天)を祀っており、日本と同様学芸の守護神とされ、二月の祭日にはカトマンズから学生がわざわざ参拝に来るところです。この寺で珍しく冷たい水が樋から流れ出ていたので、たらふく飲んでから樋の上へ廻ってみたら、そこには10m四方ほどの池があり、千匹もいるかと思う鱒が泳ぎまわっていました。これは放生池で、

魚は神様の所有物として誰もとらず、おそなえ物を投げるとサッと寄って来ます。僕の飲んだ水は、田圃の湧き水をこの池に引き込んだその余水でした。

ここから峠を越えて昨日の谷の斜面に逆もどりし、谷をつめて上りなおしです。部落の水車小屋にもぐりこんで(外は暑いので)昼食。今日は水車に落ちる水をのんでビスケットを流し込むだけという簡単なもの。この水だって、上流に部落が二つ三つあるのですが平気なものです。「水は三尺流れれば清い」という言葉はここでは現実です。それどころか、田圃で牛がかきまわしてドロドロになった水を、水壺に汲んでゆく部落さえあります。まさかそのまま飲むとは思わなければ、静置して泥を沈殿させてしまえば飲むのかもしれない。こういう浄水法もあるそうですから。とにかくここでは水は水でありさえすれば何でもよいとみえます。

ここまでくるとフルチョウキの麓の植物園に勤めるコックの縄張り、知人の家に寄ってチャン(どぶろく)を飲まされました。チャンはもろみをその場で水にといいて出すので、水加減で濃くも薄くもなります。ここでは当然サービスよく、飛び切り濃厚なのを出してくれました。それからいきなり峠への急登なので、いささかへばりました。2000mあたりから森がはじまります。*Schima*はもうなくなり、常緑のシイ・カシ、*Machilus*、*Michelia*、*Rhododendron arboreum*などが見られました。そういえば*Rh. arboreum*は、500mあたりから散見しました。フルチョウキの頂上(2700m)あたりでは*Rh. arboreum* var. *campbelliae*という、葉裏に褐色毛があってピンクの花をつける高地生の種類に変わりますが、これには気付きませんでした。低いところの*Rh. arboreum*は、葉裏が銀白色で紅色の花をつけます。

峠へついて向う側へ下れば終わりかと思ったら、コックが「こっちの方が近道だ」と尾根を行くことになりました。峠より低いところへ行くのにそれより高い尾根へ上がるのは理屈に合いませんが、ここではコックしか道を知らないので仕方ありません。上がったり下ったり、道のないところをかき分けたりさせられたので、B君はすっ

かりアゴを出して動けなくなっていました。彼はふだんは酒を飲まないところへ、特別強いチャンを飲まれたうえの強行軍ですから、参るのは当然です。どうもコックの奴が「最後にシゴイテやれ」と、地理に明るいのを幸い引き回した感じです。やっとのことでゴダワリの植物園についたのが午後8時。レレからこんなにかかるはずはないのです。先行した人夫の手配でジープが来ており、9時すぎに家へ帰りつきました。

今回の出費は、人夫賃は別で一人当り70ル

ピー(2520円)だそうです。これは帳面づらに出た金額を二等分したもので、本当はB君がかなり背負い込んでいるはずですが、もっとも僕の出張費は全額B君に預けてあり、そもそも役所からいくらもらったの知りません。精算してお釣りをもらったわけではないので、赤字か黒字かもわかりません。僕自身は途中でチャンに1ルピー(36円)使っただけでした。

(金井弘夫 Hiroo KANAI)

## 新刊

□濱田 仁：接合藻の生物学 264pp. 1990. 私費出版(〒939-03 富山県射水郡小杉町南太閤山9-44. 電話0766-56-6658). ¥2,200.

著者が永年研究対象としてきた単細胞性の接合藻ミカツキモが中心であるが、糸状のアオミドロをはじめ他の接合藻も登場して接合藻の全体像が解説される。第1章の採集と観察の方法から始まり、2. 培養の方法、3. 生育環境、4. 環境汚染の指標生物としての接合藻、5. 形態と細胞構造及び分類、6. 接合藻への放射線の影響、7. 無性生殖と有性生殖、8. 生活環と核相、9. 遺伝、の計9章より成り、巻末に名前とその由来及び用語の解説が添えられる。3章と4章は著者が日頃深い関心をもって進めてきた調査結果を中心に論議が進められ、最近の環境汚染の問題を考える上で示唆に富む内容となっている。8章は著者が最も力を注いだ部分と思われ、培養と藻体のDNA量の測定等の著者自身の研究結果から、ミカツキモやアオミドロなどの接合藻の栄養体の核相は従来考えられているように半数ではなく、倍数であると結論し、さらにDNA量から生活環の各ステージの核相の類推を進めている。ミカツキモやアオミドロは広く親しまれた名の藻であるが、それらの生物学的全体像を扱った類書はなかった。本書の刊行が歓迎されるゆえんである。なお目次と本文の標題の一致しない箇所が幾つか見られる。次版での改定を望みたい。(千原光雄)

□Kramer K.U. and Green P.S. (eds.): Kubitzki K. (ed.) *The Families and Genera of Vascular Plants Volume I. Pteridophytes and Gymnosperms.* i-xiv+404pp+216 figs. 1990. Springer-Verlag, Wien.

近年における植物分類学の知見の増大は目ざましい。それにもかかわらず、というべきか、だから、というべきか、維管束植物の分類体系を包括的にまとめるのは大変困難なことである。この難かしさを克服しようとし、分類体系の現状を総覧し、この分野における研究のさらなる活性化を目指して編纂された大著の第1冊がやっと出版された。やっと、というのは、私が依頼を受けてコケシノブ科の原稿を送ったのはもう何年か前になるからである。

近年の研究成果を網羅したという当然ともいえる唱い文句にもかかわらず、でき上りについては首をひねりたくなるところがある。科の配列は、それぞれの高次分類群ごとにアルファベット順とされた。系統関係が分かっていない科の間の関係に予断を与えないため、という理由づけはそれなりに1つの理屈ではあるのだが、それにしては科の設定の仕方が何とも大胆なのである。この種の体系の整理は、どちらかという保守的な範囲づけで解説された方がよいと私は思っているが、左程の根拠も示されないままに、勝手な科の範囲の設定をするのは、どうせ客観的な根拠はないから、という開き直りなのだろうか。確かに、保守的に